

シチエルバートの「モスクワ」論

加藤史朗

Москва в трудах М. М. Щербатова

Сиро КАТО

В 1787 г. из-под пера М. М. Щербатова, выходит «Прошение Москвы о забвении ея» — статья, написанная в эпистолярном стиле и символически адресованная «Всемиловитейшей Государыне». В действительности, однако, послание это Екатерине II направлено не было, так как представляло собой (так же как и написанная приблизительно в то же время статья «О повреждении нравов в России») набросок критического обзора современного автору состояния общества самодержавного государства.

Подателем щербатовского «Прошения» выступает сама Москва. Обращаясь к Всемиловитейшей Государыне, она сетует на «забвение ея», длящееся уже 84 года с начала строительства Санкт-Петербурга (1703 г), и взывает с просьбой о возвращении монаршей милости.

Помимо рассуждений о судьбе Москвы и ослаблении роли родовитого дворянства — рассуждений, в которых Москва выступает как объект авторской ностальгии по прошлому — «Прошение» содержит описание тяжёлых испытаний, выпавших на долю древней российской столицы, на основе которого Щербатов пытается проследить, как формировалось самовластие в России, и обозначить возможные пути преодоления недостатков сложившейся системы.

Это стремление автора наиболее ярко проявилось в труде всей его жизни — «Истории Российской от древнейших времен». К сожалению, его *opus magnum* обрывается на описании низложения великого князя московского Василия Шуйского, и первоначальный замысел автора довести повествование до эпохи Петра I остался нереализованным.

Это не означает, впрочем, что Щербатов не оставил после себя трудов по «новой и новейшей» (для XVIII века) истории России и российской

истории от древности. Первая из этих двух целей была достигнута Щербатовым в статье «О повреждении нравов в России», объектом критического анализа в которой стал период от начала правления Петра I и вплоть до эпохи Екатерины II. Вторая же цель была осуществлена в рассматриваемом нами «Прошении Москвы о забвении ея». Автор предлагает к нем полный обзор истории страны через призму роли, которую в ней сыграла Москва. В «Прошении» наиболее ярко и лаконично выражено щербатовское видение истории России.

はじめに

北方戦争(1700~21) 渦中の1703年5月27日¹⁾、ピョートル1世は、ネヴァ川の河口イジョラの地に新都サンクト・ペテルブルクの礎石を置いた。それから84年を経た1787年に歴史家シチェルバートフは、「自らが忘却されてきたことについてのモスクワの嘆願書」と題する奇妙な文章を書いた。女帝宛の書簡という形式になっているが、具体的にエカテリーナ2世に宛てられたものとする、文中にエカテリーナ2世という固有名詞が出てくるので、不自然である。むしろこの文書がエカテリーナ2世の下に届けられた形跡もないので、仮構のものと思わざざるを得ない。シチェルバートフの著『ロシアにおける道徳の損壊について』の執筆もほぼ同時期であり、彼が密かに書き溜めた専制政治批判草稿の一つであると見なすのが妥当である。²⁾

テキストの「私」すなわち嘆願者は、都市「モスクワ」である。モスクワが84年の長きにわたり「忘却されてきたこと」を嘆き、為政者が再びモスクワに目を向けるようにという願いが本文の骨子である。

モスクワは、ピョートル1世の死後に生じた旧貴族の巻き返しの中で、1728年から1730年にかけて「首都」の座を再獲得したこともあったが、それは一時的にすぎなかった。³⁾ 一方サンクト・ペテルブルクは、この「84年間」着々と首都としての機能を拡大していった。サンクト・ペテルブルクの人口が、モスクワを凌駕し始めたのも、この頃のことであった。とは言ってもモスクワは首都機能を全て失ったわけではなかった。戴冠式は、相変わらずクレムリンのウスペンスキー大聖堂で行われたし、エカテリーナ2世の法典編纂委員会も同聖堂に招集された。だが、モスクワの役割は、徐々に儀礼的な機能を果たす場へと特化されつつあった。

モスクワの衰運は、ロシアの祖リューリックの系譜につながる名門貴族シチェルバートフにとってみると、後に「半ば忘れられた作家」⁴⁾と評される自らの運命と重なって見えたのかもしれない。こうしたシチェルバートフをゲルトツェンは、彼の主著『ロシアにおける道徳の損壊について』をラジーシチェフの『サンクト・ペテルブルクからモスクワへの旅』とロンドンで初めて合冊で刊行した際、それに付した序言の中で「愚痴っぽい老人」というイメージで描いた。⁵⁾だが、シチェルバートフの言動は、ピョートル改革とその後の帝政ロシアの発展に対する異議申し立ての一例として、その後のロシア史に無視できない影響をもっていた。当のゲルトツェン自身、西欧近代が育んだブルジョア的な心性をメシチャンストヴォとして批判したが、ロシアにおけるその心性の萌芽をピョートル改革に見いだした点において、図らずもシチェルバートフの批判を継承しているとも言えるのである。⁶⁾

1 嘆願書の内容

以下に嘆願書を抄訳しながら、内容の概略を紹介する。なお引用文の小見出しは、論文筆者によるものであり、原文にはない。訳文中の（ ）内は、訳者による補足である。⁷⁾

タタール支配からの独立

冒頭、私（モスクワ）は、「いとも慈しみ深き陛下」に対し、最近の84年間、自分の存在が君主たちから忘れ去られてきたと嘆く。だが、自らがロシア史の中で果たした役割を振り返ることには逡巡せざるをえない。過去の勲功を述べたとて、忘却の淵から救われるとは限らないからである。しかし、少なくとも歴史の証人であろうとする決意を示して、次のように語り始める。

「私はウラジーミルが崩壊した後の、今から429 (459?) 年前にイオアン・ダニーロヴィチ（イヴァン1世またはイヴァン・カリター在位1325-40）が大公位につく以前の、遠い時の闇のなかに埋もれた私の始まりについては語るまい。かのタタールという破壊者・征服者に対して、初めて立ち上がったのは私ではなかっただろうか。ママイの軍勢の破壊に対して、ドミトリー・ドンスコイ（1350-1389）が我々の中から軍団を組織して

立ち上がったのではなかったか。同じ大公の時代、凶悪なるトフタムイシによる破壊に耐えたのは、私ではなかったか……我が城壁は死体に満ち、建物は焼けただけ、市民の血によって大地が染められた。——これらは私の献身の徴ではあるまいか。オドエフ、コゼリスク、モジャイスク、ヴァジマ、ベレフ、ヴォロトゥノク、スモレンスクをロシアに併合するという勝利をもたらした軍団は、モスクワの城壁から出撃したのではなかったか。アンドレイ・ヴァシリエヴィチ公(ウグリツキー分領公、イヴァン3世の弟)に扇動され、内紛が生じた折に、彼の傲慢なる行動をうち破り、幼少のツァーリ、イヴァン・ヴァシリエヴィチ(イヴァン4世または雷帝1530-84)の帝位を守ったのは、我が城壁から出撃した兵士たちではなかったか。カザン、アストラハン、ヴァトカを征服したのも、彼らではなかっただろうか。自治を享受していた偉大なノヴゴロドやプスコフは我が軍門に降らざるを得なくなり、そこにあった民会の鐘は、モスクワの城門に運ばれてクレムリンの銃眼に吊るされ、我が忠誠の証となっている。侵略してきたデヴレット・ギレイ(キプチャクのハン)の軍勢は、我が城門を包囲し、モスクワの郊外を焼き払った。その際、我が高貴なる息子たちが犠牲となった。だが私の信念は揺るがなかった。それから間もなくして、私は銃眼からデヴレット・ギレイその人がモルディの戦いで倒れ、我が愛する息子の一人ヴォロトゥインスキー公が名声をあげる(クリミア・タタールとの戦いにおいて勝利した)のをほとんど目の当たりにする満足を味わった。さらにその後、引き続いて他の軍団が我が城門から出て、ポロツク、リトアニアの一部、リヴランドを征服した。不運に見舞われ、これらの征服地を失うこともあったが、我がツァーリに対する私の信頼は、不運と勝利の間にあっても平衡を保っていた。若きツァーリ、フョードル・イヴァノヴィチの時代にタタールが我が城壁に押し寄せたが、それを越えることはなかった。彼らは撃退され、散り散りに逃げ去った。後に残されたのは、我が息子たちの遺品であった。ドンスコイ修道院は、この出来事の永遠の、忠誠心に満ちた記念碑である。」⁸⁾

リューリック朝の断絶とロマノフ朝の成立

シチェルバートフは、その後のモスクワがたどった苦難の歴史を記述する。とりわけ、フョードル・イヴァノヴィチの死(1598)により、リュー

リック朝が断絶したことに、深い悲しみを表明する。

「フョードル・イヴァノヴィチの死により、我がツァーリたちの系譜、すなわちモスクワの玉座に登る人びとがリューリック、ウラジーミル聖公、ウラジーミル・モノマフへと繋がる系譜が断ち切られた時、私（モスクワ）は滂沱の涙を流したのである。」⁹⁾

悲しみに暮れ、寄り辺なきモスクワは、フョードルの妃の兄ボリス・ゴドゥノフを帝位に迎えることになった。

「当時、私には彼の悪行はわからなかったのだ。彼が自らの手のかつての我が公たちの無辜の血でよごしていようとは。だが私の目から隠されていた秘密は、有力な貴族たちの前に次々と明らかになった。」¹⁰⁾

このため、ボリスは不安の中で時を過ごし、彼の子も非業の死を遂げた。こうした混乱の時代は「我が迷妄の時ではあったが、不実の時であったわけではない。」

ボリスの即位とその後の空位時代を経て、全国会議によりミハイル・ロマノフをツァーリに選ぶことになる。この経緯について述べた箇所、筆者は、一種の社会契約論を展開するが、今回はその道筋をとらなかつたと言う。

「あらゆる自然法と国民の法は、王統が断絶した場合には、人民はその本来の権利を回復し、新しい君主を選んだり、その法を変更したりするものであることを示している。私はそうしただろうか。否である。私が帝位につけたのは、女系の縁戚すなわち皇后アナスタシーヤ・ロマノヴァの兄の孫で幼く、流刑の地にあったミハイル・フョードロヴィチ・ユリエフ・ロマノフ（在位1613-45）であった。」¹¹⁾

ピョートル1世の登場とモスクワの放棄

モスクワは、全力を挙げて新しいツァーリを支援し、ロシアを内紛から解放し、同時にまたスウェーデンやポーランドなどの外圧からも守った。モスクワは、ツァーリの父フィラレートだけではなく、ツァーリの子や孫に対する敬意も払った。モスクワはやがて幼いピョートル（在位1682-1725）の即位を迎える。銃兵隊の反乱においても西欧への大使節団の派遣で彼が不在の時も、私（モスクワ）はピョートルを守り、彼に忠誠を誓ってきた。しかし、彼はモスクワを棄てたのである。

「ああ何と言うことだろう。まさにその人が私を捨て去ったのだ。海軍

を創設したり、貿易を始めたり、進行中の戦争を身近に指揮する必要性からなのか、あるいは私（モスクワ）の古い慣習を軽蔑してなのか、新たに彼の名を付けた都市（サンクト・ペテルブルク）に首都を移動したのである。」¹²⁾

君主の行幸が稀になり、モスクワの心は傷つく。さらに最良の市民たちが、モスクワを離れ、見知らぬ地（サンクト・ペテルブルク）に移住を余儀なくされた。多数の農民たちが、不毛の沼地を耕すために送り込まれた。一方モスクワでは建物の改築や新築は禁止された。ピョートルの死後、その後エカテリーナ（エカテリーナ1世 在位1725-27）が即位するが、長くは続かない。次いでピョートルの孫、ピョートル・アレクセーヴィチが即位、ピョートル2世（在位1727-30）が誕生する。若きツァーリは、モスクワを愛しており、我が心に再び希望が蘇った。「しかし開花した野の百合のような若きツァーリは、死の鎌でなぎ倒されてしまった。」¹³⁾

モスクワに冷淡な女帝たちの時代

ピョートル2世の死後、高官たち（ゲネラルリテート）が集まり、イヴァン5世（在位1682-89）の娘、アンナ・イヴァノヴナ（在位1730-40）が皇帝に選出された。しかもアンナは即位に際し、自らの権力を制限する「諸条件」（コンディツィイ）に署名したのである。ある意味では立憲君主制への契機を孕む行為であった。生涯にわたり、専制批判の立場を貫いたシチェルバートフではあったが、1730年の「諸条件」については、批判的であった。

「（ピョートル2世の）後継者として残ったのは二人の幼い妹と二人の叔母であった。集まった高官たちが選んだのはツァーリ、イヴァン・アレクセーヴィチ（イヴァン5世）の娘、アンナ・イヴァノヴナであった。しかし選出にあたって、彼女の権力と統治を制限する条件がつけられた。私はいつも私の君主たちに恩義を蒙っていたので、彼らの権力に制限を設けようとするに我慢ならなかった。そして間もなくすべての条件が無効とされると、私は一も二もなく女帝の善意に身を任せただであった。

何ということだろう！ この女帝もまたわが城壁から立ち去るという行為によって私に報いたのである。彼女の全治世において、我が眼は再び彼女の姿を見ることがなかった。

この時から今にいたるまで、私は我が城壁の内を訪れる君主たちの姿を見る喜びを奪われたままである。エリザヴェータ女帝（在位1741-62）と現在の君主エカテリーナ女帝（エカテリーナ2世 在位1762-96）はたまたまモスクワに巡幸なさってはいるが、あまりにも短期間である。何と悲しいことか。この方々の滞在は、ご自身たちの（モスクワに対する）不満を表すものとなっているのだ。なぜならやっと我が都に、ご先祖たちの古き都にやっど到着になったかと思うと、忽ちネヴァ川の岸にお帰りになるのがさも楽しいかのように、いそいそとモスクワを辞してしまわれるからである。」¹⁴⁾

シチェルバートフがここで言及しているのは、ピョートル2世の時、一時モスクワに首都が戻ったという事実である。1727年、エカテリーナ1世の逝去とともに即位したピョートル1世の孫ピョートル2世は、未だ12歳の幼帝であり、大貴族メーンシコフの庇護を受けていた。メーンシコフは15歳になる自分の娘と幼帝との結婚を画策し、周囲の貴族の反発を招いて失脚した。代わって登場したのが名門貴族ドルゴルーコフ（ドルゴルーキーとも言う）家であった。最高枢密院を牛耳ったヴァシーリー・ルキーチ・ドルゴルーコフは、従弟のアレクセイ・グリゴリエヴィチ・ドルゴルーコフの娘をピョートル2世と婚約させて、首都をモスクワに戻した。しかしピョートル2世は、婚礼の直前に天然痘にかかって死亡した。ヴァシーリー・ルキーチ・ドルゴルーコフは、ピョートル1世後の旧勢力の代表格であり、最高枢密院で議長を務めていたドミトリー・ゴリーツィンと提携して、ピョートル1世の姪でクールランド公妃アンナを「諸条件」¹⁵⁾に署名させ帝位につけた。しかし最高枢密院を牛耳る名門貴族の寡頭政に反対する新貴族層の圧力の下で、アンナ女帝は、「諸条件」を破棄し、ドルゴルーコフとゴリーツィンは失脚した。1732年、首都は再びサンクト・ペテルブルクに戻され、モスクワは徐々に衰退の道を歩む。モスクワの愁訴は続く。

モスクワの記憶

「祖国に仕え多くの血を流した人々の後裔である多数の貴族、歓呼の雄叫びをあげることで君主に対する自らの忠誠と献身を表した無数の民衆、多くの奇跡に彩られ、神の僕たちが眠る聖なる土地、自らの先祖たちの墓、ロシアの力の基礎を築いた歴代の我が君主たちが住んだ古い建

物、我がモスクワの魅力あふれる界限も彼らの心を止め引き付けることが出来ぬのであろうか。

悲しいことに、私は新たに建設された都の美しさ、そこを流れる川の大きさ、そこで繁栄する貿易に目を向けて、こうした君主たちのもっとも悲しむべき行動を正当化し納得しようとする。だがいとも慈しみ深き陛下、どうか我が(モスクワの)状況をご覧下さい。我が古き廃墟は未だ効用ある魅力に富んでいる。魅力と言うのは、それらが陛下の帝国におけるもっとも古きものを表しており、祖国に捧げた様々な功績を思い起こさせるからである。」¹⁶⁾

嘆願者は、モスクワで目にするのは「金の柵で囲まれた古き宮殿の小ぶりで質朴なる建造物」と言う。

「ここにツァーリ、イオアン・ヴァシーリエヴィチが住み、最初の僭称者である破門僧グレゴリー・オトレピエフ(偽ドミトリー1世?—1606)が逃れようとした窓が見え、反逆者バスマノフがシュイスキーの手で処刑された場所、クラスノエ・クルィリツォもある。」¹⁷⁾

筆者は、さらにこの地にまつわる歴史的な事件を列挙し、クレムリンのさまざまな教会が陛下の祖先たちにより建立され、彼らの敬虔さを示すものとなっていると述べるとともに、陛下ご自身が荘厳なる儀式により戴冠し、君主となった場所ではなかったかと問う。またクレムリン内にあるさまざまな聖堂は、ロシアの敵に対する勝利を記念するものでもあった。さらにこの地にまつわる歴史的な事件を列挙し、モスクワが記憶されるべき都市であると主張する。ポクロフスキー大聖堂はロシアの勝利と征服の象徴であり、クードリノにあるポクロフ教会は、トゥシノの盗賊として知られる第二の僭称者(偽ドミトリー2世)を倒した記憶と結びついている。イリヤ・オビデェンヌイ聖堂は、疫病の流行を思い起こさせ、スレチェンスキー修道院は「ウラジーミルの生神女」のイコンがモスクワに到着した事実とテミール・アクサクの脅威からモスクワが解放された事件の記憶と結びついている。モスクワの街路や道標そのものが歴史を刻印している。トゥルバにある廃墟はモスクワを占拠していたポーランド人たちの敗北を思い起こさせ、ザモスクヴァレチエは、デウレット・ギレイに対する抵抗とその結果として我が息子たちの最後を見届けた場所である。アルバート街は、タールの商人たちが活躍した場であり、ポオルヴァノフカには彼らの住居があった。こうした歴史の襲を筆者は語って止まない。

「少しでも教養のあるロシアの公民ならば、自らの祖先が祖国や君主に対して果たした忠誠や尽力に思いをいたし、それに気持ちを奮い立たせることなしに、一步も進めないだろう。」¹⁸⁾

モスクワの地理的優位

筆者によれば、モスクワ川はネヴァ川に比べ川幅や水質において劣り、しかも放置されていて清流を失いつつある。だがまだモスクワ川には若い魚が生息しており、清流をとりもどすことが出来、ネヴァ川の水がもたらすような病気で住民を苦しめることもないと言う。こうした言い回しは、無論、川に仮託したモスクワとサンクト・ペテルブルク論なのである。

「それゆえに、もし陛下の慈悲深い眼が我が城壁を見つめ、陛下がしばしば訪問されることで我が青春が蘇るなら、きっと我が城内にも高樓が軒を連ねるといふ大きな成果を生むだろう。新しい建築と古い建築とが交じり合うことにより、我が（モスクワの）美しさは倍增するだろう。コロメンスコエ、ヴォロンツォーヴォやその他の周辺の村々は、よりよい環境の下で、ペテルゴフやツァールスコエ・セロの地に取って代わることができる。その肥沃な土壌は、沼地になることはなく、君主の慈愛の豊かさを示す豊饒なる収穫をもたらすだろう。言いかえれば、それは、全世界を養う慈愛の神の手を思いおこさせるものとなる。ツァーリの心が晴れ晴れとすれば、それはすなわちツァーリを思う我が喜びとなるだろう。」¹⁹⁾

続いて筆者は、モスクワの地理的優位に言及する。

「我が都（モスクワ）は帝国の中央に位置するため、全ての情報が政府の下に迅速に到達するという利便さがある。そしてまた君主の権力はあらゆる方向に均等に届き、どこかが、その盲点となることはない。」²⁰⁾

モスクワの地理的優位は、大貴族たちがあらゆる場面で彼らの先祖の功業を目にすることが出来るだけでなく、国内の状況を一層認識でき、人民の必要性をより良く知ることが可能にした。さらに自分の領地に近いモスクワにいたので、彼らは、親しくその経営を行い、他の領地経営にも刺激を与えた。こうして生じた私的利益は、やがて社会的利益につながった。

「結局のところ、ピョートルの都市における交易の隆盛は、我が君主たちをその地に留まらせ得るのだろうか。というのは、交易の規模がいかにかに大きく有用だとしても、その広がりや、ペテルブルクの周辺に由来す

るのではなく、我が都市（モスクワ）に近いロシアの他の地域の豊かさによってもたらされているのである。モスクワの状態が活況を呈すると、国の歳入はますます増え、一方、名門貴族たちが港から遠い地にいることにより、外国の商品を手に入れる機会をもたず、そうした商品そのものに対する渴望や彼らの贅沢の気風が抑えられるだけではなく、彼らの実例がその他の者に影響を与え、ロシアの至る所に浸透した悪を除去するのである。」²¹⁾

『ロシアにおける道德の損壊について』の著者らしく、最後は、道德論でまとめ、女帝に「自らの君主たちに忠誠を尽くして年老いた都市」が「謹んで上程した嘆願書」に耳を傾けるように呼びかけ、以下のように嘆願の文を結ぶ。

「いとも慈しみ深き陛下、主君たちへの忠誠を果たしながら年老いた町（モスクワ）が、恭しく陛下に差し出しているものをご覧下さい。我がすべての功績、私や我が子らの忠誠に目をお向け下さい。昔も今もロシアに寄与している成果をお認め下さい。そうすれば、私が見捨てられた奴隷のように我が君主たちの眼差しを奪われるはずはなかりう。陛下に仕える我が子らは、その念頭から忘れ去られはしないだろう！ 彼らは、陛下と祖国に対する愛の炎を燃え上がらせる熱情において、陛下の近習となる幸運を得たものと変わらぬ。違いは次の点のみ。陛下の寵愛への期待によって生まれた者に対して、彼らは全くそうした期待をもつことなく、陛下と祖国に対して勝るとも劣らぬ愛を自覚しているという点である。我が古きものを、そして我が子らの献身を鼓舞せられよ。陛下のご臨席により、我が子らの父祖が持っていたような剛毅さ、寛大さを彼らに注ぎこまれよ。ロシアの美德と至福とともに、古きものの再興者となられますよう。」²²⁾

2 嘆願書の意義

シチェルバートフの「嘆願書」は、「臣下の主君に対する個人的な願いを述べたものではなく、古き首都全体の新しい首都に対する訴状である。」²³⁾また彼はこの中で、モスクワの運命に同情し、モスクワをノスタルジアの対象としてのみ論じているわけではない。モスクワの苦渋に満ちた歴史の中に、専制の生成過程と、同時にそれを克服する道筋を見出そうと

しているのである。彼は、その主著『太古からのロシア史』（以下『ロシア史』と略記）においてモスクワをどのように描いていただろうか。残念ながら膨大な『ロシア史』の中にその姿を見極めることはできない。なぜなら、1762年に筆を起し1790年に死去するまで、まさにライフワークとして書き続けた『ロシア史』は、1610年のモスクワ大公ヴァシーリー・シュイスキー（ヴァシーリー4世）の退位で終わっているからである。彼の初心は、ピョートル1世時代という彼にとってみれば「近現代史」までを描き、通史としてのロシア史を完成することにあった。しかし、寿命がそれを叶えなかった。1610年までの記述で終わった『ロシア史』第7巻第3部が出版されたのも、死後1年を経てからのことであった。では、彼は生前、「近現代史」や「同時代史」を叙述しなかったかと言えば、全くそうではない。彼の主著として挙げられる『ロシアにおける道德の損壊について』は、まさしくピョートル1世からエカテリーナ2世に至る「近現代史」であり、ユートピア小説『オフィールへの旅』は、同時代のロシアの批判書である。その他に、ミルレルの後継者として修史官を務めた彼は、公務としてピョートル1世時代のアルヒーフを整理したり、エカテリーナ2世の宮廷革命を正当化する叙述をしたのであった。²⁴⁾ それらはいわば建前としての修史の仕事であった。その反面で彼は密かに「近現代史」に関わる本音の叙述に力を注いでいたのである。前記二著のほかにも様々な作品があるが、本稿で論じている「自らが忘却されてきたことについてのモスクワの嘆願書」は、モスクワから見たロシアの通史となっている。シチュエルバートフの歴史に対する姿勢は、すでに「嘆願書」冒頭に明瞭に読み取ることが出来る。それは不明瞭なことには、触れないという姿勢である。『太古からのロシア史』冒頭にも次のように述べている。

「この歴史を編むにあたり、かつて存在した諸民族について私は空白の存在を憶測によって埋めようとはしない。」²⁵⁾

中世ロシア、すなわちルーシの分裂と衰退を扱ったのは『ロシア史』第2～3巻においてであった。主な論点は、次の三つである。1) ルーシが分裂し分領制に至ったのは、なぜか。2) 分領制はどのような帰結をもたらしたか。3) タートル＝モンゴルの襲来にルーシが敗北した理由は何か、という三点である。第一点について、シチュエルバートフは、分領制の起源を国境線の防衛という観点から論じる。公位は、子どもにではなく、成人となっている弟に譲られた。防衛を第一義としたからである。当初、分領

制は積極的な意義をもっていた。「公共の福祉」(общее благо)や重要な国事に関すること全てに、公は名門貴族と連携しながら関わっていたが、やがて内紛とルーシの国土の荒廃により、「公共の福祉」は忘れ去られ、エゴイズムが蔓延するようになった。²⁶⁾ タタール=モンゴルの侵入は、こうした時期に起こった出来事である。ルーシがタタール=モンゴルに敗北した理由として、シチェルバートフは、分領公たちの内紛や常備軍の欠如などの他に、ルーシの民の「信仰深さ」(набожность)を挙げている。²⁷⁾

モスクワの台頭を論じたのは第4巻である。この巻で彼は、ドミトリー・ドンスコイからイヴァン4世即位までの歴史を描く。

シチェルバートフがモスクワ大公として高い評価を下しているのは、イヴァン3世である。「彼は偉大な君主であった。というのも、彼が偉大なるルーシの基礎を築いたのであり、しかも流血なくしてこれらすべてを行ったし、自らの政府において、常に強いものよりも賢いものを用いたからである。」²⁸⁾

クリュチェフスキーが夙に指摘し、パイプスが敷衍したように、専制(самодержавие)という用語を使い始めたのは、イヴァン3世であった。ロシア語 самодержавие は、ギリシア語 autokrateia の訳語であり、語源としては、英語の autocracy と同じである。しかし、歴史の文脈で考えると、それは、モスクワ大公の独立性を強く意識した用語である。すなわちあらゆる外部の勢力、とりわけタタールのハンの支配から自由で独立していることに重点が置かれた語である。²⁹⁾ だが、イヴァン4世により、この言葉はツァーリ権力の無限性を意味するものとなった。つまり、ロシアと外部勢力との関係が、ツァーリと臣民との関係に転化したのである。³⁰⁾

シチェルバートフがロシア史に関心を持ち始めた契機は、貴族と国家との関係が動揺しているという階級的な危機意識であり、名門貴族の社会的意義を問い直そうとするものであった。古いロシアにおいて、公(князь)は、専制君主ではなかった。公は、ボヤール(бояре 大貴族)、ドゥルジーナ(дружина 公の親兵)などの「名士たち」と権力を分かち持っていたのである。³¹⁾ 彼は名門貴族が国の基礎をなしている実例をフランスやスペインに求め、君主と中間団体としても貴族の勢力均衡によって成り立つ君主制の普遍性を主張したのであった。³²⁾

イヴァン4世による専制政治の確立過程を描いたのは第5巻である。専制権力と大貴族との闘争は、イヴァン4世の治世の当初より見られた。し

かし当初は、両者の関係は決定的に破綻してはいなかった。シチェルバートフによれば専制権力と大貴族の分裂が後戻りのできないものとなったのは、アストラハンの征服（1556）と選抜者会議の清算（1560）以降であった。その一番の理由は、イヴァンの個性にあった。「ツァーリは……生まれつき苛酷な性格であった。その幼年期より大貴族の間でたびたび生じた騒乱は彼を流血の惨事に慣れさせ、心の中で大貴族に対する大きな憎しみを育んだ。」³³⁾ 彼の恐怖政治のもとで「健全なる精神、祖国への愛、君主への忠誠心が、剣と処刑によって根絶され、恐怖と戦慄がそれにとって代わった。」³⁴⁾ 結果として、モスクワは、大きな代償を払い、衰退していったのである。

3 シチェルバートフのピョートル1世観

シチェルバートフ家は、リュウリックにつながる名門³⁵⁾ではあったが、モスクワにあって、ボヤーレに次ぐ側用人（окольнічий）の官位にとどまっておろ、政治の前面に出ることはなかった。とは言っても、貴族会議の成員を務めることはあった。³⁶⁾ シチェルバートフの祖父ユーリー・フォードロヴィチは、ピョートル1世時代に高等宮内官を務めた後、軍務につき、旅団長（бригадир）として軍功を挙げ、晩年はアンドレエフスキー修道院に隠棲し、高位聖職者となった。父ミハイル・ユリエヴィチは、モスクワの総司令官を務めた後、アルハンゲリスクの県知事に任ぜられた。³⁷⁾ モスクワの歴史とともに歩んできた名門であるが故に、ピョートル改革によって台頭した新興貴族、つまり勤務による貴族と対立する立場にあった。しかし、シチェルバートフのピョートル1世観は単純ではない。「嘆願書」においても、モスクワを捨て新都サンクト・ペテルブルクを築いたピョートルについて、後の女帝と比べ、あまり非難がましくない。むしろ、啓蒙主義の申し子としてのシチェルバートフは、他のロシアの知識人同様、ピョートル1世の称賛者でもあった。文学者としてピョートルを讃える詩を書いただけでなく、歴史家として、ピョートルのアルヒーフの整理を行った。晩年の代表的著作『ロシアにおける道徳の損壊について』の中にある「必要ではあったが、おそらく行き過ぎた改革」³⁸⁾ というピョートル改革に対する評言が、彼の基本的なスタンスを物語っている。このような彼の姿勢は、エカテリーナ2世の要請の下、様々な歴史編纂作業を続ける

中で、徐々に強まっていった。彼が『ロシア史』の編纂を決意したのは、1762年といわれる。³⁹⁾ すなわち、エカテリーナ2世の即位につながる宮廷革命に直面し、歴史を動かす「秘密の発条」を知りたいという願望に発するものであった。⁴⁰⁾ シチェルバートフは、1767年にミルレルの後を継いで、修史官となった。修史官である以上、国務の原則に従わざるを得ない。それは二つある。いずれもエカテリーナ2世の大訓令により表明された原則である。一つは、ロシアはヨーロッパの国家であるということ。二つ目は、ロシアは専制政治を国是としているということである。⁴¹⁾ 彼はこの原則を表面的には支持しながら、心中においては、批判していたのである。シチェルバートフによれば、ピョートルが作り上げたのは、君主制の国家であった。したがって、そこには法の支配が貫徹されなければならない。なぜなら、法が君主制という統治形態を支える本質だからである。⁴²⁾ 未だ啓蒙されざる民衆を導いたという点で、ピョートルの専制権力は、臨時的、限定的に認められる。ピョートルなくして、「がさつな習俗の中であって、あらゆる点で非文明的な民衆のなかで」改革を遂行することは不可能であった。⁴³⁾ シチェルバートフは、『ピョートル大帝の欠点と専横に関する考察』と題する文章⁴⁴⁾の中で「彼は必要に迫られて独裁者となったのであり、心中では君主と家臣の双務的な義務に対する共感と言わば概念的な理解力もっていた」⁴⁵⁾と述べる。晩年の主著『ロシアにおける道德の損壊について』の中で彼は1730年のアンナ・イヴァノヴナの即位に触れ、次のように述べている。

「しかしながら、ピョートル2世が逝去すると、その後ロシアの帝位につくように定められた者は誰もいなかった。最高位の高官たちは、世界のかくも広大な地域を治めるものとして誰を選ぶかという重大な決定をしようとして集まった。図々しく、利己的であったにしる、しかし彼らは最も高貴な家柄の貴族たちの意見を聞かずに、それを決めることはできなかった。

様々な意見が出された。……中略……

すでにその場に集まっていた高官たちは、もしも彼らの利己心や野心が影をおとさなかったとしたら、偉大な企図ともいべきものをあらかじめ決定していた。すなわち、それは国家の基本法を制定し、君主権を元老院あるいは議会により制限するという企図であった。

だが、元老院に出席できるのは二、三の家門のものに限られた。かく

して過剰な君主権は削減され、権力は、多数の名門貴族の落胆をよそに、少数の高官たちの手に渡ったのである。一人の君主に代わって、寡頭支配が生まれたのであった。⁴⁶⁾

つまり先に検討した「嘆願書」における1730年の「諸条件」に対する評価と等しく、否定的な態度である。

ピョートル以後の歴史の負の側面として挙げられるのが、外来的要素である。彼は「道徳の損壊」の源は、奢侈にあると説き、奢侈がロシア人の心を害するに至ったプロセスを示す。「道徳の損壊」に関する考察は、ピョートル1世以前のロシア、すなわち「臣民のみならず、主君たちも極めて慎ましい生活をしていた⁴⁷⁾」というモスクワ公国時代から始まる。それがピョートル1世以後、奢侈がロシアの生活を蝕むようになったと言うのである。

ピョートル改革をめぐるシチエルバートフの態度は、明らかに二律背反的である。啓蒙主義的改革を是としながら、それがもたらした直接の帰結を「道徳の損壊」に見出しているからである。『ロシアにおける道徳の損壊について』の冒頭には、次のような記述が見える。「信仰と神の法は私たちの心の中から消え去り、神の機密は蔑視されるようになった。公民のための法も蔑みの的となり始めた。どういうことかと言えば、裁判官はどんな事件の審理においても、法に基づいて判決を下そうと努めるよりも、賄賂によって正義を売りわたし、私益を図ったり、高官に阿ってその意に沿おうと努めるのである。」⁴⁸⁾

こうした現状を見る限り、ロシアには「文明」があるのかどうか問われねばならない。メージンによると、「文明」という言葉は、18世紀半ばまで動詞 *civiliser* としてしか使われなかった。1760年代に入って初めて *civilisation* という名詞が生まれた。ロシア語の文献で *цивилизация* という文明を表す名詞が使われるのは19世紀に入ってからであった。⁴⁹⁾ つまり、ピョートルを神になぞらえたロモノーソフやスマローコフの時代は去り、ピョートルによる文明化の結果を冷静に見つめる視点が生まれたのである。まさにベツコイが言ったように「ピョートルはロシアにおいて人間をつくった」⁵⁰⁾ のであった。こうした中で文明の「創造主」に対する厳しい批判が生まれるのは自然であった。シチエルバートフの論敵ボルチンも例外ではなかった。彼によれば、ピョートルは「何世紀もの期間を要したことを、数年でやりとげようとし、砂上に我が文明の樓閣を作り始めた」の

であった。彼はまたロシア社会がピョートル改革の結果支払わなければならなかった途方もない代価についても指摘した。⁵¹⁾ シチエルバートフも「人間」ピョートルに着目する。すなわち彼はピョートルの中に「地上の神」ではなく、すぐれた政治家を見出したのである。すぐれた政治家であろうとも、人間としての欠陥や弱点を免れることはできない。そこで、彼は「貴族」がツァーリを輔弼することが必要だと説いたのである。「大訓令に対する注釈」の中で彼は、ピョートル大帝にこれほど短期間にあれほどの大変化を可能にさせたのは「信仰、統治形態それに貴族の力である」⁵²⁾と述べている。ピョートルの遺産の評価において、シチエルバートフとボルチンは、共通の要素をもっていたのである。それは、彼らの同時代人ダーシコヴァにおいても認められる。彼女は『回想録』の中で、「ロシアは全て彼のおかげを蒙っている。なぜなら、彼がロシアとロシア人を創ったのだから」という主張に反対し、「ピョートルに対するこうした評判は、外国人の作家が作り出したものだ」と述べている。⁵³⁾

4 ユートピア小説に仮託された 「モスクワとサンクト・ペテルブルク」

『スウェーデンの貴族S氏のオフィール国への旅』(以下『オフィール』と略称)⁵⁴⁾は、1784年に執筆された一種のユートピア小説であるが、未完のままであり、19世紀末に至るまで公刊されることもなかった。しかし、そのことが、逆に公刊に伴う制約と無縁であり、シチエルバートフの本心の表明を可能にしている。著者が描くオフィール国とは、旧約聖書の地名⁵⁵⁾であるが、あからさまにロシアを指し、国名・地名・人名のほとんどが、現実の名称のアナグラム(字謎)となっている。

主人公のSは、1740年生まれのスウェーデンの貴族。父親が政争に巻き込まれ、フランスに亡命、父の死後フランス領東インドに派遣され、同地に11年滞在。その間、バラモンからサンスクリットを習う。やがて母国で政変が起き、彼の父が属していた勢力が勝利したため、母国へ帰ることになる。1776年11月末、インドを出航、母国に向かう途中、喜望峰近くで暴風に見舞われ、6日間にわたって漂流するうちに、陸地に遭遇。船が岸に近づくと、数艘のボートの出迎えを受け、援助が必要かどうかとサンスクリット語で尋ねられる。サンスクリットの出来るのはSだけである。

彼が必然的に通訳となり、この国の様子を記録するというのが粗筋である。

本論の主題から最も注目されるのは、最初に到着した都市がペレガプであり、一時クヴァモに代わる首都であったという点である。ちなみにクヴァモは、同名の川に沿った都市であり、ネギヤ川に沿った都市ペレガプを創ったのは、皇帝ペレガであった。まさにクヴァモ→モスクワ、ネギヤ川→ネヴァ川、ペレガプ→サンクト・ペテルブルク、ペレガ→ピョートルというアナロジーがすぐに読み取れるようになっている。ブグロフが最近の研究⁵⁶⁾で明らかにしたアナグラムのリストの中から一部を紹介する。ちなみにブグロフは、『オフィール』の第3章に出てくる都市テルヴェクがトヴェーリであると指摘していない。しかし、ペレガプ（ペテルブルク）か

『オフィール』に出てくる名称	示唆されている現実の名称
ドゥイスヴィ Дысвы	スウェーデン人 шведы
パリ Пали	ポーランド人 поляки
ピウルィ Пиуры	プロイセン人 пруссаки
タギン Тагии	シナ人 китайцы (またはトルコ人— турки)
都市アギアラ г. Агиара	アルハゲリスク Архангельск
都市ガビノビヤ г. Габиновия	ノヴゴロド Новгород
都市エフキ г. Евки	キエフ Киев
都市クヴァモ г. Квамо	モスクワ Москва
都市ペレガプ г. Перегаб	ペテルブルク Петербург
都市エフォンピアク г. Ефонбия	エカテリンブルク Екатеринбург
都市ヤアリクス г. Яарикс	リガ Рига
都市ジェニギビィ г. Женигибы	ニジニ・ノヴゴロド Нижний Новгород
都市 г. Занга	カザン Казань
ゴアルダ湖 оз. Голда	ラドガ湖 оз. Ладога
ピオ川 р. Био	オビ川 р. Обь
ゴルヴァ川 р. Голва	ヴォルガ川 р. Волга
イネスナ川 р. Инесна	エニセイ川 р. Енисей
クヴァモ川 р. Квамо	モスクワ川 р. Москва
キヤン川 р. Киян	ヤイク (ウラル) 川 р. Яик (Урал)
ネギヤ川 р. Негия	ネヴァ川 р. Нева
ブレドナ川 р. Предна	ドニエプル川 р. Днепр
ホルボ川 р. Холбо	ヴォルホフ川 р. Волхов

らクヴァモ（モスクワ）への旅の途中にあり、近くにゴルヴァ（ヴォルガ）川が流れている古い都市と言え、トヴェーリしかないであろう。

ペレガブは、海に近い湿地帯に皇帝ペレガによって造られ、国の中央にある旧都クヴァモから遷都され、ここが新都となった。皇帝ペレガは、行政秩序を確立し、芸術・科学・軍事技術を導入した。新都は意外にも「物事の自然性に反して *противу естества вещей*」（強調原著者）発展し、「超自然的なるもの *превыше естества*」（同前）が生まれたのであった。しかし、新都の建設には、物質的にも人的にも多くの犠牲を伴った。新都はオフィールの人民の怨嗟的となった。建設当初からあった新都の欠陥として以下の点が列挙される。

1. 皇帝は帝国の中心部から遠く離れたところに住んでいたため、国内事情に疎くなった。
2. 都市クヴァモは捨て去られてしまったにしても、その古い伝統と帝国の中心に位置するということから、人民のより良き部分や知識層は常にここに集まった。皇帝との関係は疎遠になり、敬愛や尊崇の念を失ってしまった。
3. 皇帝に仕える高官たちは、自分たちの領地から離れて暮らしているうちに、地方の生活状態を忘れ去り、人民の苦しみがわからず、重税によって彼らを苦しめ始めた。
4. みな宮廷に集まっており、宮廷だけを祖国として尊重するために、彼らの心の中から公共の福祉 (*общее благо*) という感覚が全く失われてしまった。
5. 帝国の他の地域から離れているため、人民の溜息は、首都に届かなくなった。
6. 我が偉大なる人物たちが、太古から守ってきた善き行いの範例は、それが行われた場所が忘れられるとともに、記憶からも消え失せ、子孫たちにとって覚醒を促したり、鑑となったりするものではなくなった。
7. 首都が敵国との国境の近くにあることから、人民は苦しみ、国家は疲弊し、玉座は揺らいだ。多くの人が反乱をおこして玉座を奪った。反乱が頻発し、ついには我が祖国を一新するほどの大変動に至った。⁵⁷⁾

時が経つにつれ、こうした欠陥が目立つようになり、1700年⁵⁸⁾の後に首

都はクヴァモに戻された。

オフィールの悪弊は、1700年前の出来事として語られる。では、現在のオフィールでの統治はどうか。役人たちの生活はその地位と権限に応じてさまざまであるが、おしなべて質素である。その善良さ、謙譲、清廉は驚くばかりである。それに引き替え、罪を犯すのは、もっぱら我々外国人である。

「この国が何によって注目に値するかと言えば、それは賢明な統治によってである。この地では、国家権力は人民の利益にかなっており、貴族の高官（*вельможа*）は完全に礼にかなった大胆さで、君主に自分の考えを述べる権利を有している。阿諛追従は、宮廷から締め出されており、真実が宮廷へ入る口には、何の障害物もない。またこの地では、法は人民全体の同意によって作られ、不断に見守られ修正されることにより、より適切な法となる。政府といえるものも存在しているが、その構成人員は少ない。事件はまれである。なぜなら、幼い時から一人一人に躰けられた高潔さが、事件が芽ぶくことさえ許さないからである。この地で貴族は、奢侈に流れることなく、淫蕩に陥ることもない。」⁵⁹⁾

『オフィール』における政体は、立憲君主制である。晩年の未完の草稿「貴族は商人として登録が可能かという問題の検討」においてシチェルバートフは、ロシアの君主は徐々に「祖国の父」としての役割を喪失し、専制君主となっていったと指摘し、「あらゆる法や人民の富が専制権力の下におかれた」⁶⁰⁾と嘆く。今や君主は、人民に敵対している。それゆえに彼らには人民を抑える力が必要なのであり、常に彼らは軍に取り囲まれている、と言う。⁶¹⁾つまり、君主と中間団体としての貴族との均衡に立憲君主政体の特徴を見たシチェルバートフは、社会においては法と慣習が相互に補完的な関係にあると考えた。法とは、権限の現象であり、ある種の制度化されたものであり、また規制したり組織化したりするものである。これに対して、慣習とは、自然発生的なものであり、制御できない伝統的なものである。⁶²⁾『オフィール』における立憲君主制は、道徳や慣習にもっとも親和的なものとして描かれている。

さて問題は、二つの首都をめぐる議論である。『オフィール』という作品において、シチェルバートフは、サバコラという偉大な改革者皇帝を登場させ、その後、1700年にわたり改革が続いたと述べる。サバコラの遺言ともいべき文書は本文中に原著者により、強調文字で紹介される。骨

子は、両首都均衡論である。その後のロシア知識人たちにおける両首都論(モスクワはアテネに、サンクト・ペテルブルクはローマに比定される)の原型ともいうべきであろう。要約すると、ペレガブにオフィール国の皇帝が住むことはよろしくない。だが、建設に多大の犠牲を払ったこと、海に開かれた港をもっていることから、この都市を今後も守っていかねばならない。殖産興業に意を用い、さらに海軍学校を建設するなどの諸方策をとった。首都は旧都クヴァモに戻すべきであるが、3年ごとに数か月を皇帝はペレガブに住むようにせよというものであった。⁶³⁾ このくだりは、明らかにモスクワを嫌ったエカテリーナ2世への当てつけである。

エカテリーナ2世時代にフランスの啓蒙思想家ディドロがサンクト・ペテルブルクに招請され、1773年10月から翌年の3月まで約半年間その地に滞在した。ディドロは、その間、エカテリーナ2世に対して、首都をモスクワに戻すよう進言した。彼によれば国境近くに位置するサンクト・ペテルブルクは、敵からの攻撃に対し脆弱であり、動物の体に譬えれば「指先に心臓がある」か、「足の親指に胃袋がある」かのように不自然なものであった。⁶⁴⁾ だが、エカテリーナは、モスクワを「無為の都市」として嫌った。エカテリーナの率直な発言が記録されている。「私はモスクワを好まない。だがペテルブルクに対しては何の偏見も持っていない。……モスクワは怠惰な首都である。モスクワの大ききさそ常にこの主な原因となっている。」⁶⁵⁾

まとめ

以上の検討により、「嘆願書」は、簡便なロシア通史となっており、シチュエルバートのロシア史に対する見方が凝縮されたものであるということが出来る。人が歴史意識に目覚める契機は、現在という時代に対する危機意識にあることが多い。シチュエルバートの危機意識とは一体何であったか。まず、一般論的に言うと、ピョートルの西欧化は、ロシアに商品経済の発達を促し、古くからの名門貴族の間に危機感がうまれた。アルカディウス・カーンの論文「ロシアにおける《西欧化》の代償——18世紀における地主貴族と経済」⁶⁶⁾は、まさにこの問題を論じたものであった。カーンは、この中で、当時の地主貴族が西欧化の過程において、国家の支援を必要とするような境遇に追い込まれて行く実態を描き、「地主貴族の経済的・政

治的力は、領地から多くの土地収益を集める能力とともに、その土地収益を獲得する際に、政府の協力を得ることが出来るかにかかっていた⁶⁷⁾と述べている。また彼によれば、1790年代の貴族の家計の最低限度額は、225ルーブリと算定される。そのためには少なくとも45人の男性農奴が必要であり、地主貴族の半数以上がこの水準をクリア出来ないとしている。⁶⁸⁾シチェルバートフが代弁した貴族の危機意識は、法典編纂委員会における貴族と商人の論争や、自由経済協会が提起した農奴制の可否をめぐる論争の中に垣間見ることが出来る。こうした中でシチェルバートフは、一貫して農奴制の擁護者であった。例えば「農民問題覚書」(1768)の中で、シチェルバートフは、ロシアにとって今後とも農奴制の保持が必要であると説き、商人が農奴を保有することに反対する。また彼は階級間の壁を低くすることにも反対する。「身分や財産の異なる人々が集住する場所では、道徳の損壊が進むからである。」⁶⁹⁾

フェドーソフの言葉を借りれば「シチェルバートフは、貴族のおかれた歴史的な状況の中に危機を見出した最初の貴族イデオログであった。」⁷⁰⁾

危機を認識した貴族には、二つの選択肢があった。一つは啓蒙絶対主義体制の内側で生き残りを図る道であり、もう一つはそれを批判し、西欧的な立憲君主制を目指す道であった。この二つの道の交差が、エカテリーナ2世の下における歴史論争の背景ともなっている。

論争におけるシチェルバートフの論敵ボルチンは、ロシアのナショナリズムの創始者の一人とされる。⁷¹⁾だが、彼のナショナリズムは、エカテリーナ2世が目指した「ナショナリズム」であり、シチェルバートフの「パトリオティズム」と一致しない。シチェルバートフの初期の作品に「祖国愛をめぐる二人の友人間の対話」(1759)と題する小論がある。そこで彼は、祖国に奉仕するものと権力者に奉仕するものとを明確に区別し、前者をフィロパトリス(Филопатрис)、後者をポリティス(Политис)と呼んでいる。⁷²⁾この対比は「モスクワ」と「ペテルブルク」という両首都のイメージの差異を喚起させるばかりではない。ネーションをめぐる原初的な対立の図式が両首都論に胚胎していたといえるのではなからうか。

注

- 1) 礎石が置かれたのは、ネヴァ河河口の兎島である。ネヴァ河流域のこの地

域は、旧来、フィン・ウゴル系のイジョラ人の居住地であった。

- 2) 専制批判は、エカテリーナ即位後の「大訓令」批判に始まり、彼の生涯を貫く原則となる。特に1783年のクリミア併合に触発して書かれた「賢い会話」以後、エカテリーナ2世批判は激しさを増す。Берков, П. «Умной разговор» М. М. Щербатова, Русская литература, 1966, Л., стр. 79-81. 本論文末尾の付録年表参照。
- 3) ピョートル2世の即位。
- 4) Пыпин, А. Полу-забытый писатель XVIII века, «Вестник Европы», т. VI, кн. XI, 1896.
- 5) О повреждении нравов в России князя М. Щербатова и Путешествие А. Радищева с предисловием Искандера, London, 1858, стр. V-XIV.
- 6) ゲルツェンのピョートル1世観については、拙稿「ゲルツェンのピョートル1世観——「専制革命」論を中心に——」、『ロシア史研究』No. 48、1989年、55-69頁参照。
- 7) テキストには、いくつかの版がある。底本としたのは、М. М. Щербатов, Сочинения Князя М. М. Щербатова, СПб, т. 2, 1898所収のものである。また Russian Intellectual History: an Anthology, (ed., Marc Raeff), 1966所収の Valentine Snow による英訳を参照した。さらに、К. Г. Исупов 編の «Москва — Петербург: Pro et Contra», СПб, 2000所収のロシア語テキストと注釈も参照した。
- 8) М. М. Щербатов, Сочинения Князя М. М. Щербатова, СПб, т. 2, 1898. стлб. 53-56.
- 9) Там же.
- 10) Там же, стлб. 56.
- 11) Там же, стлб. 56-57.
- 12) Там же, стлб. 58.

ピョートルが都市の名に冠したのは、聖ペテロであって、ピョートルではない、という議論がある。しかし、この都市の呼称には、当初から表記にぶれがみられた。Санкт・ピーチェルブルフ、Санкт・ピーチェル・ブルフ、St. ピーチェルブルフ、Санкт・P・ブルフ、S. Piter Burch、Санктペテルブルグ、Санктペテルブルフ、Санктペテルズブルフ、ピーテルスブルグ、St. Petersburg, St. P. Burg、ペトロポリスなどであるが、外国語的な表記を分類するとオランダ語、ドイツ語、ギリシア語の3種に分かれる。アルファベットで分けると、ラテン語とギリシア語の2種がある。純粋にロシア語風のバリエーションとしては、グラード・ペトラ、ペトログラードがある。稀ではあるが、スヴァートイ・グラード・ペトラ（ピョートルの聖なる都の意味）という表現もある。ツァーリの名を冠したという理解も一般的

であった。

- 13) Там же.
- 14) Там же.
- 15) 「諸条件」の内容は、1. 正教信仰の維持 2. 再婚と後継者の指名をしない 3. 枢密院の現状維持 4. 枢密院の同意なく宣戦・講和・新規の課税・高官の任命・土地の賜与 5. 貴族の生命・財産・名誉を保障 6. 国家の歳入を個人的に消費しないなど。これらの「諸条件」は、スウェーデンに学んだものの。阿部重雄『タチーシチェフ研究』（刀水書房、1996年）参照。
- 16) Там же, стлб. 58.
- 17) Там же.
- 18) Там же.
- 19) Там же.
- 20) Там же.
- 21) Там же.
- 22) Там же.
- 23) Исупов, К. Г., Указ. соч., стр. 9.
- 24) 具体的には Чечулин, Н. Д. Хронология и список сочинений Кн. М. М. Щербатова. СПб., 1900.
- 25) Там же, стр. 55.
- 26) Федосов, И. А. Из истории русской общественной мысли XVIII столетия, М. М. Щербатов, М., 1967, стр. 54–55.
- 27) Там же, стр. 55.
- 28) Там же, стр. 58.
- 29) Pipes, R. Karamzin's conception of the Monarchy. Harvard Slavic Studies, v. IV, 1957, p. 43.
- 30) Ibid, p. 44.
- 31) Федосов, И. А., Указ. соч., стр. 23.
- 32) Там же, стр. 75.
- 33) М. М. Щербатов, История Российская от древнейших времени, т. 1–7, СПб, 1901–4, т. 5, ч. 1, стр. 431 Цит. по Федосов, И. А., Указ. соч., стр. 62.
- 34) Там же, стр. 63–64.
- 35) アルテュミエフが巻末に掲げた系図によると、ミハイル・シチエルバートフはリュウリックから数えて27代目になる。Артемьев, Т. В., Михаил Щербатов, СПб., 1994, стр. 90. なおアルテュミエフが依拠した資料は、Российская родословная книга. Изд. П. Долгорукий. Ч. 1. СПб., 1855である。
- 36) Мякотин В. Дворянский публицист Екатерининской эпохи. Сб. «Русское Богатство», No. 1, 1897, стр. 205.

- 37) Артемьев, Т. В., Михаил Щербатов, СПб., 1994, стр. 5.
- 38) Prince M. M. Shcherbatov, *On the corruption of morals in Russia*, edited and translated with an introduction and notes by A. Lentin, Cambridge, 1969, p. 134 (Russian text), p. 135 (English version).
- 39) Артемьев, Т. В., Указ. соч., стр. 11.
- 40) Там же.
- 41) 拙稿「シチエルバートフによる専制批判——「大訓令」に対する「注釈」を中心に——」、山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺』、ナウカ社刊、1992年を参照。
- 42) Артемьев, Т. В., Указ. соч., стр. 41.
- 43) Мякотин, В. А. Дворянский публицист екатеринской эпохи.; Князь М. М. Щербатов, «Русское Богатство», СПб, 1897, № 1, стр. 231.
- 44) 1855年に発見された草稿は、最初に1859年の『書誌学雑誌』第12号に掲載され、翌年、O・ボジャンスキー編の『シチエルバートフ公爵文集』に収録された。Разные сочинения князя М. М. Щербатова, Москва, 1860.
- 45) Там же, стр. 21.
- 46) Prince M. M. Shcherbatov, *op. cit.*, p. 174, 176 (Russian text), p. 175, 177 (English version).
- 47) Prince M. M. Shcherbatov, *op. cit.*, p. 118 (Russian text), p. 119 (English version).
- 48) Prince M. M. Shcherbatov, *op. cit.*, p. 112 (Russian text), p. 113 (English version).
- 49) Мезин С. Д. Петр I как цивилизатор России: два взгляда. «Европейское Просвещение и цивилизация России», М., 2004, стр. 6.
- 50) Там же, стр. 7.
- 51) Там же, стр. 8.
- 52) *Неизданные Сочинения*, стр. 19.
- 53) Дашкова, Е. Р., Записки, М., 1987, стр. 137.
- 54) 拙稿「十八世紀ロシア貴族の夢——シチエルバートフ『オフィール国への旅』をめぐる」、早稲田大学『社研研究シリーズ』第29号、1991年、1-27頁参照。
- 55) 『聖書辞典』(新教出版社刊、1981年)によれば、オフル(オフィール)は金の産地として知られている。ヒラムは、ソロモン王のためにアカバ湾のエジオン・ゲベルから船でオフィール(オフル)に高価な品を運んだ(王上10:11)。ヒラムとはダビデ、ソロモン時代のツロの王の名、あるいは金属職人ヒラム・アビフとされ、いずれの場合も、ソロモンの神殿建築にかかわる人名である。なお、ヒラム・アビフが組織した親方・職人集団は、フリーメイソン起源説の1つであり、フリーメイソンに関わっていたシチエルバートフに馴染みが深い地名であった。

オフィール国を取り扱った先行著作として、17世紀ドイツに以下の事例が見出される。

(1) Johannes Valentinus Andreae (1586–1654), «Reipublicae Christianopolitanae descriptio» (「キリスト教ポリス共和国の記述」 1619)

(2) «Königreich Ophir» (「オフィール王国」 1699、匿名で書かれた) である。特にプロテスタント的なユートピアを描いた(1)では検閲や国家による私生活の管理などが主張され、シチエルパートフの『オフィール』に繋がる内容が見られる。

56) Бугров Д. В., «Надежда» в Антарктиде: загадки офирской утопии князя М. М. Щербатова. Известия Уральского государственного университета, № 47 (2006) Гуманитарные науки. Выпуск 12.

<http://proceedings.usu.ru/?base=mag&doc=topics.jsp> (15/09/09)

57) М. М. Щербатов, Сочинения Князя М. М. Щербатова, СПб, т. 1, 1896, стлб. 792–793.

58) 1700年とは、ピョートルがユリウス暦を採用し、モスクワ・ルーシと断絶した年である。

59) Сочинения Щербатова, т. 1, стлб. 751–752.

60) М. М. Щербатов, Неизданные сочинения, М, 1935, стр. 140.

61) Там же.

62) Артемьев, Т. В., Указ. соч., стр. 17.

63) Сочинения Щербатова, т. 1, стлб. 794–795.

64) Исупов, К. Г., стр. 12.

65) Исупов, К. Г., стр. 9.

66) Arcadius Kahan, The Costs of “Westernization” in Russia: The Gentry and the Economy in the Eighteenth Century. *Slavic Review*, v. XXV, No. 1, 1966, pp. 40–66.

67) op. cit., p. 42.

68) op. cit., pp. 45–47.

69) Сочинения Щербатова, т. 1, стлб. 796.

70) Федосов, И. А., Там же, стр. 69.

71) Cf. Hans Rogger, The “Nationalism of Ivan Nikitich Boltin”—Halle, Moris (Compiler), For Roman Jakobson, The Hague, 1956. pp. 423–429.

72) Артемьев, Т. В., Указ. соч., стр. 6–7.

シチェルバートフ年譜

年	日付	事 項
1733	0722	シチェルバートフ、モスクワで生誕。父ミハイル・シチェルバートフ(陸軍少将、公爵)・母イリーナ・ソツェフ＝ザセキン。シチェルバートフ家はリューリック朝につながる名門。祖父ユーリーはピョートル大帝のもとで北方戦争に従事、ナルヴァの戦いで負傷。父ミハイルはピョートル改革の推進者の一人。アンナ女帝のもとでモスクワ総督を務める。なおシチェルバートフの娘ナターリヤ・ミハイロヴナがチャアダーエフの母親。
1735	0101	ニジェゴロド県アルザマス郡でボルチン生誕。
1736		貴族の勤務義務25年に短縮。
1738		タチーシチェフ、注釈を付け、ルースカヤ・プラウダと1550年の法典のテキストを科学アカデミーに提出。
1739		タチーシチェフ、『ロシア史』を科学アカデミーに提出。
1741		エリザヴェータ即位(～1762)。
1744		ノヴィコフ生誕。
1746		セミョーノフ近衛連隊に勤務(～1762)。
1748		ミルレル、科学アカデミーにおけるロシア初の修史官となる。
1749		ラジーシチェフ生誕。
1750		タチーシチェフ死去。モスクワを離れ、ベテルブルクに行き、フリーメイソンの活動に参加。ベテルブルクのロッジには、当時の実力者ヴォロンツォーフ公爵、ゴリーツィン公爵、詩人で劇作家のスマローコフなども属していた。
1751		ボルチン、近衛騎兵隊に勤務(～1768)。
1756		軍務につく(少尉補)、実戦に参加したかどうかは確認なし。
1757		ロシア、七年戦争においてプロイセンに敗北。
		ロモノーソフ、『ロシア語文法』刊行。
1759		『祖国への愛をめぐる二人の友人たちの会話』執筆。フィロパトリスを信条とする。
		ルクレール、エリザヴェータ女帝の招き(?)で訪露。「法の必要性と効用について」を『月刊論集』に掲載。この頃「統治に関する考察」をフランス語で執筆。
		1750年代、ポープ、モンテスキュー、ヴォルテールなどの翻訳。
1760		ロモノーソフ『系譜図付き簡略版ロシア年代記』。
1761		中尉に昇進。
1762	0218	ピョートル3世即位。「貴族の解放」(貴族は軍務・行政職などの国家勤務義務から解放される)勅令。シチェルバートフ、大尉として退任。1766年まで領地にこもり、ロシア史に関する研究を始める。修道院の領地国有化令(実施は1764年)に際し、領地の貴族への売却を主張。ピョートル3世の殺害、エカテリーナ2世即位。

シチェルバートフの「モスクワ」論

		デーヴィド・ヒューム『イギリス史 The History of England, from the invasion of Julius Caesar to the Revolution in 1688』(全6巻)刊行。
		『太古からのロシア史』執筆の裁可を受ける。
1765		ロモノーソフ死去。ヨーロッパ各地に設置された自由経済協会、ロシアにも設置される。同協会の設立に参加。
1766		70人の貴族の推薦を受け、法典編纂委員会に出席するヤロスラヴリ郡の貴族代表として選ばれる。
		ロモノーソフ『古代ロシア史』刊行。
1767	0100	法典編纂委員会に対するエカテリーナ2世の大訓令。
		カーメル・ユンケルスキー(侍従補)の官位を得て再び勤務。法典編纂委員会に出席。ヤロスラヴリ郡の貴族の要望書(ナカース)を作成。7月31日に始まった大委員会代表に選出される(最低の得票)。ピョートル1世の官等表の見直し・貴族の権利・商人の商業権の制限・農民問題などに関し、名門貴族の権利を擁護する主張を行うが、1769年に法典編纂委員会が解散したあと、シチェルバートフはエカテリーナとその政府に対し、より批判的立場をとるようになる。
		ミルレルの推薦で修史官となる。
		自由経済協会、農奴問題に関する見解について公募。
		ルイチコフ『カザン史の試み』、エミン『ロシア肇国以来の全古代生活を描いたロシア史』第1巻刊行。
1768		商務参議会に勤務。《農民問題覚書》。この論文の中で、彼は自由経済協会が提起した農奴所有に関する問題に答え、農奴制保持の必要性を説く。修史官となり、ピョートル大帝にいたるまでのロシア史を編纂。
		ノヴィコフ退役。ジャーナリストとしての活動を開始。
		トルコとの戦争(～1774)。
1769		ボルチン、ヴァシニコフ地方の税関局長を務める(～1779)。
		デイドロの推薦で、ルヴェックとルクレール、訪露。ルクレールは再訪。シュレーザー、科学アカデミーを辞す。
1770		科学アカデミー付属の印刷局から『太古からのロシア史』第一巻刊行(表紙の表記上は1771年)。
		ルクレール、芸術アカデミーの会員となり、Bousssole de terre(陸地の羅針盤)という雑誌を刊行。
1771		紋章局長官となる。
		『太古からのロシア史』第2巻刊行。
		モスクワでベスト流行。
1772		ノヴィコフ、『ロシアの作家に関する歴史辞典の試み』を出版。
		『太古からのロシア史』第3巻脱稿。
1773	0523	エカテリーナ2世への書簡。側近のコジツキーを介して提出。おおよそ4万ループリの財政支援を要請し、聞き届けられる。
		四等宮廷官(デエイストヴィチェリヌイ・カメルゲール)となる。

		プガチョーフ反乱(～1775)。
1774		オルフェーリンの『ピョートル大帝の生涯と栄光』に序言を書く。
		『ロシアにおけるかつての帝位僭称者についての短い物語』
		『太古からのロシア史』第3巻刊行。『太古からのロシア史』第4巻脱稿。
1775		「全ロシア帝国県行政機関設置に対する評言」を書き、エカテリーナ2世の総督に全権を与えた地方行政政策を批判。
		ルクレール、フランスに帰国。
1776		『ロシアにおける昔の官位とその責務について』
		科学アカデミー名誉会員となる。
1777		「ロシア考察における統計学」
1778		三等官となる。国家歳入参議会議長。聖アンナー等勲章授与。
1779		元老院議員・現任枢密参議官となる。聖アンドレイ勲章を賜わる。
		ノヴィコフ、モスクワに移住。
1780		ヴラヂーミル、ヤロスラヴリ、コストロマの監察官となる。
1781		『太古からのロシア史』第4巻第1部刊行。
		ボルチン、軍参議会事務長となる。
1782		ルヴェックの『ロシア史』全5巻、刊行(～1783)。 Levesque P.-Ch. Histoire de Russie, t.1-5. P., 1782-83.
		ボルチン、『サレプタ連水陸路の年代学』を刊行。
		元老院広場にピョートルの騎馬像設置。
1783		ルクレールの『古代および近代ロシアの自然・道徳・市民・政治史』、パリで刊行(～1784)。 Le Clerc N.-G. Histoire physique, morale, civile et politique de la Russie ancienne, v.1-3. P., 1783/Histoire physique, morale, civile et politique de la Russie moderne, v.1. P., 1783.
	0930	ロシア・アカデミーが設立され、ボルチンがそのメンバーに選出される。シチェルバートフも遅れてメンバーとなる。
	1011	歴史家のミルレル、モスクワで死去(78歳)。
		『太古からのロシア史』第4巻第2部刊行。
		『スウェーデンの貴族S氏のオフィール国への旅』の執筆(～1774)。
		「貴族に関する考察」を執筆(～1785)。
		エカテリーナ2世『ロシア史に関する覚書』を刊行。
1784		『ロシアにおける官位について』(著作集2)
		ボルチン『ルクレール氏のロシア中世史および近世史への注釈』を執筆(～1786)。
		『太古からのロシア史』第4巻第3部刊行。 この年初めまたは前年中に「賢い会話」が執筆される。

シチェルバートフの「モスクワ」論

1785	『リューリクに由来するロシアの公の由来に関する簡潔な歴史的概説』 貴族と都市に対する特権認可状の公布。
1786	『太古からのロシア史』第五巻第一部刊行。 健康を理由として元老院議員・国家歳入参議会議長を辞任。 この頃『ロシアにおける道徳の退廃について』を執筆（～1787?）。
1787	対トルコ戦争。 飢饉（～1788）。 「モスクワが忘却されていることに関するモスクワ市の訴え」
1788	対スウェーデン戦争。 ペテルブルクでボルチンの『ルクレール氏のロシア中世史および近世史への注釈』刊行。 現任枢密参事官を辞す。「死刑に関する考察」 ボルチン、軍参議会員となる。
1789	ペテルブルクで『シチェルバートフの書簡に対するボルチンの回答』刊行。 クニャジニン、『ノヴゴロドのワジーム』執筆。 「靈魂の不死に関する対話」 「我が思想および時に過分の勇気から発せられた発言に関する釈明」 「国を治める高官への書簡」 『太古からのロシア史』第5巻第2～4部刊行。
1790	『太古からのロシア史』第6巻第1～2部刊行。 『太古からのロシア史』第7巻第1～2部刊行。
1212	シチェルバートフ、モスクワで死去。
1791	『太古からのロシア史』第7巻第3部刊行。
1792	モスクワで、シチェルバートフ著(?)『ロシア史の著者シチェルバートフ公爵の書簡に対する少将ボルチン氏の回答に寄せた注釈：ロシア史の愛好家にとって興味深く有用な知識、さらには彼の反論・批判・誹謗に対する真実の弁明と忌憚なき反証を内容とする』刊行。 1006 ボルチン、サンクト・ペテルブルクで死去。
1793	サンクト・ペテルブルクでボルチンの『シチェルバートフの歴史第一巻に対する少将ボルチンの批判的注釈』刊行。
1794	サンクト・ペテルブルクでボルチンの『シチェルバートフの歴史第二巻に対する少将ボルチンの批判的注釈』刊行。
1802	ラジーシチェフ死去。
1858	ゲルツェン、ロンドンの自由ロシア印刷所から『道徳の退廃』をラジーシチェフの『ペテルブルクからモスクワへの旅』と合冊にして刊行。